

スペインにとり、「世界」は 1492 年を境に、「西欧（自己）対イスラム（他者=敵）」の構造から「西欧、イスラム、新世界」の三者構造になった。フィリピナス諸島到達（1565 年）によってアジア大陸が視野に入ると、『東方見聞録』を通して旧知の「文明世界」、明がスペインの目前に立ち現れたが、明こそはスペインの海外発展の目的地であった。新大陸での自国のあり方に対する反省や「高度文明」に対する高い期待を持って明への接近を図るスペイン・カトリック王国。その他者像は当初の「物資豊かな高度文明チナ」、いわば「鏡の中の理想の自己」像から「実存のチナ」像へと変化していく。

西欧の対他者行動の一つのケースとして、スペイン人がこの「高度文明」の他者出現の衝撃をいかに受け止め、理解し、行動したかを以下の三つの切り口から史料に基づき考察を試みた。

三つの切り口とは、①宣教・通商開始の手段としての「証明論」、②フィリピナス諸島からのチナ・チナ人宣教、③諸島内居住のチナ人（サングレイ）暴動事件である。個々に直接繋がりが無いかに見えるこれら 3 つのテーマは、スペインの国是、キリスト教宣教と被宣教民という点で①と②は共通し、異質の国家体制、明との対峙（かなりスペイン側の一人相撲だが）という意味では①と③は共通する。同じ問題を異なる角度から観察することで、課題の立体的把握を意図したものだ。

①に関しては特に 1582 年から 1588 年頃の議論を扱うが、時代は「征服」を「平定」と言い換え、学識者の中では安易に他者の武力征服を肯定しない方へ動いていた。明中国の実体について具体的には殆ど不明な時期から、フィリピナス諸島から明への接近策の建言は「征服」と言う選択枝を含めていたが、この「征服論」には二つの流れがある。「やろうと思えば可能だ」程度の実体に乏しい征服論と、明という存在をある程度認識した上で各種の手段を整えた、いわば「実体のある証明論」で、ここで問題にするのは後者である。マニラのイエズス会士が立案と推進に中心的役割を果たしたこの証明計画は、アジア在の同会拠点と会員を総動員し、ポルトガルとスペインのデマルカシオンを跨ぎ、軍事力を地球を三分の二周させる大計画である。成功すれば同会の東洋宣教独占に利すること大であるのでスペイン的意義を疑う向きもあるが、ここでの解題点は「証明論」立案者とそれに賛同した者の明に関する報告書の分析を通して、フィリピナス在の人間に大きなインパクトを持った「証明論」の原点と対明観を問うことである。その結果、「証明論」が表向き権原とする明の内外に対する抑圧ではなく、むしろ明への正当な評価、つまり人、モノの厳格な出入管理、文化的優越感、緻密な国家統治体制を明が有する故に接近は不可能との絶望感に原点はあり、フェリーペ王のポルトガル王位継承が機動力を与えたと言える。同計画への賛否両議論は文明国「明」への観念論と現実の明がスペイン人に与えた衝撃の双方を具体的に明らかにする好材料であり、同時に西欧の他者に対する姿勢（文明度、肌の色に拠る分類）とその論拠（一神教故の他者への干渉と他者への不可侵の間の揺れ、暴力も含めた手段と目的の関係）、また戦争論が生じる所以等々優れて今日的な実証課題を提供する点を指摘した。

②は、高度文明国チナへの関心を最も早くから、継続的且つ熱心に表明した宣教者の意識と行動の問題である。新大陸での宣教活動が安定期に入った当時、開拓期の宣教活動と被宣教民のキリスト教受容に反省と失望を味わっていたが、その反動でチナの被宣教民としての資質を理想化し、チナ宣教熱を高めていた。それ故、「証明論」の主たる論者が聖職者であったのも偶然ではない。だが、明の入国管理は厳しく、僅かなりとフィリピナス諸島からの本土宣教が可能になるのは明帝国崩壊への過程で華南の管理機能が低下した 1630 年代である。1570 年代から数度の入国敢行と失敗の一方で、チナ宣教の代替

また予行演習としてサングレイ宣教に特にドミニコ会が取り組んでいる。イエズス会のように教義の「適応」はなく、チナ語（閩南語？）のカテキズムの作成・印刷（1592年）、サングレイ特別税の改宗者への免除、医療サービスの提供等の外的改宗促進策をもって臨んだ。その結果、サングレイ人口の約10～15%の改宗を得た。その率が高いか低いかは見方が分かれるところだが、低いと見るなら、何が障壁であったのか。キリスト教への定着を願ってチナ人に髪を切ることを促す、チナ人の習慣の否定など（むしろこの姿勢を抑制したのは世俗側）、またサービスの不適正（病院など）がその要因として浮かび上がる。他方、諸島から明に入ったドミンゴ・デ・ナバレテは、明国内で取られる教義に関する「適応策」の危険性をかなり早い時期に指摘している。例えば獄死を人間最低の死に方として忌み嫌う中国人の感情に配慮した結果、イエスの罪人としての十字架上の死、人類のための贖罪死と言うキリスト教の中心テーマを避けている事である。高度文明が理想的なキリスト教受容を可能にするという従前の期待は観念の世界に過ぎず、完成度の高い文明であること自体がキリスト教への関心を殺ぎ、改宗を困難にする、つまりキリスト教の普遍性主張に本格的な挑戦を体験したわけだ。だが、サングレイの社会的地位の低さもあり、諸島ではこの挑戦を厳しく受け止めることは無かった。宗教宣教は宣教者に自己認識と改革を迫る点で被宣教者にも劣らぬ試練を与えるものだが、明入国が困難なら自己を奴隷として売り渡してでも入国を遂げようとする肉体的自己放棄よりも自己相対化の方がいかに困難かをこの事例は浮かび上がらせる。

③はサングレイの諸島における存在が惹起する問題である。彼らは諸島に財源（滞在税などの課税対象）、流通の主力、労働力として極めて重要な存在であった。その重要性と植民者の20倍以上に当たる人口と利発さが惹起する脅威の矛盾は、常にスペイン人には喉に刺さった骨であり、恐怖に起因する抑圧とスペイン人とサングレイの意識の齟齬がたびたびの暴動に大きな原因となっていた。その齟齬とは何か。1603年の暴動の原因を究明するスペイン人の報告書からは以下の点を指摘できる。つまり、両者の国境観の違い（西欧が明確な境界線を想起するのに対し、明帝国は皇帝を中心に据えた外周への広がり度で帝国を捉える）、また国民観（正確には王対臣下、両者の互惠関係に基本があるのをサングレイにも当てはめ、彼らと明帝国の繋がりに恐怖する）、サングレイの労働観（搾取へのスペイン人自身の意識を投影する誤認識）を主として挙げる事が出来る。1639年の暴動の原因及び事後処理との比較は、一世代を隔てる中でスペイン人の異文化世界に対する状況認識の広がりを実証する。実際、この間対明関係は交易の増加と双方の実利獲得の現実の中で地方政府との実質的交渉を通して明側のペースで進み、それをスペイン人が現実として受け入れ、その中で行動している。

以上3点の考察は、ハード（国家構造など）の認識はソフト（習慣、死生観など）に比して容易であり、適応も進みやすいこととスペイン側の現実の受容を示す。だが新大陸でのスペイン人の自己像をアジアの現実と直面する中で自ら修正していく姿は、むしろ現在のスペイン人自身には認識しづらいものらしく、「証明論」を扱う四半世紀ほど前の論文は明征服に至らなかったことを訝る。しかしアジアから見れば征服が実現しないのは何の不思議も無いことで、それは16・17世紀の報告文書を19世紀以降のコンテクストで読むことに起因する多くの西欧中心主義の一例であろう。